

## 環境アセスメント学会生態系研究部会・国際交流委員会勉強会報告

### ■テーマ：地域社会特性と生態系サービスを考慮したサンゴのオフセット～バヌアツ共和国の港湾開発事業の事例～

■話題提供者：東京工業大学環境・社会理工学院竹田進吾氏

■コーディネータ：大日本コンサルタント株式会社新井聖司

■日時：令和元年8月1日（木）15:00～17:00

■場所：東京都市大学横浜キャンパス 33H 教室

■主催及び対象者：環境アセスメント学会生態系研究部会・国際交流委員会

#### ■概要：

近年、持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）に代表されるように、自然資本・社会資本の保全は、持続可能な社会の構築に向けた世界共通の目標となっている。このような資本を地域単位で持続的に活用していくため、米国や EU 諸国では開発影響を相殺する生物多様性オフセットが取り入れられている。本勉強会では、東京工業大学環境・社会理工学院の竹田進吾様をお招きし、「地域社会特性と生態系サービスを考慮したサンゴのオフセット～バヌアツ共和国の港湾開発事業の事例～」についてご講演をいただいた。本勉強会は、生態系研究部会・国際交流委員会の合同開催で行われ、演者を含む学会関連の参加者 10 名、東京都市大学田中章研究室の学生参加者 10 名、計 20 名での開催となった。生物多様性オフセットは、これまで、生物学的な妥当性に主眼が置かれてきたが、本事例では、環境面に加えて社会面についても配慮がされた事例であった。具体には、港湾開発事業に伴う影響が想定されたサンゴの移植について、対策後のモニタリング調査の結果が悪かったこと（サンゴの定着率が低かった）、地域のニーズとして移植対策のような事後処理的な対策ではなく、サンゴの永続性が担保され、かつ多主体が関連するような対策が望まれたことにより実施されたオフセット事例であった。社会面の配慮として、サンゴ礁の生態系サービスに関する機能（レクリエーションや漁場の利用等）への評価が行われており、それらは現地調査や関係者ヒアリング結果を基に定量的な解析がされたものとのことであった。ご講演後のディスカッションでは、オフセットに至る経緯、代償に関する算定手法、対象地における今後のオフセットの取組内容や課題、環境配慮に対する我が国との考え方の違いなどについて議論がなされた。また、竹田様からは、バヌアツ政府やオフセット地の住民など、関係者の自然保全に対する想い、オフセットの我が国への展開の可能性などについてお考えをお聞かせいただいた。本事例において、オフセットの実施主体はバヌアツ政府ということであったが、オフセットの実施へ向けてプロジェクトチームが技術的指導・コンサルティングを行ったことについては大変意義深いといえる。また、オフセットについての法制度が整備されていない地域でそれを達成するためには、地元市民や政府を含めた関係者の自然保全に対する想いが原動力となる。バヌアツと同様に、我が国も自然に対する畏敬の念は強く、自然保全に対する人々の素地は十分にあると考えられるので、先進自治体や先進企業によって徐々にオフセットの取り入れが進むことを期待する。

（レポーター：大日本コンサルタント(株)新井聖司）